

奈良部先生を悼む

本学会顧問ならびに本学会会長として長年にわたって、北海道地理学会の発展に貢献された奈良部理先生が心不全のため、1999年8月17日に逝去された。先生は98年11月に脳梗塞を患われ、転院されたご自宅近くの宮の森病院では、ご家族の手厚い看護もあり、快復が期待されていました。しかしその後容態が急変され幽明境を異にされました。享年82歳2ヵ月であった。謹んで哀悼の意を捧げます。

先生は1917年(大正6)6月18日に秋田県でお生まれになり、札幌一中を経て1941年に東京文理科大学理学科地理学に入学され、44年6月に卒業された。その間に兵役に編入され、47年2月に復員された。文科大学では福井英一郎先生のもとで気候学を修められ、復員された年の11月から翌48年の9月まで札幌管区气象台に技官として勤務されました。その後は現札幌西高等学校の前進にあたる北海道札幌第二高等学校教諭を経て、51年4月に北海道学芸大学助教授(札幌分校)として赴任されました。その後は1964年4月に教授に昇任され、81年4月には北海道教育大学を退職されました。この間1969年2月からは北海道教育大学の代議員・評議員として大学の管理運営にも携わり、難局のなかの大学整備に尽力されたほか、同年4月からは社会科教育の講座も兼任された。退職後は北海道教育大学名誉教授となられ、88年3月まで札幌商科(現学院大学)人文学部教授として社会科教育を中心として学生の指導に当たられた。なお、92年4月には勲三等旭日中授章を授与されている。

先生が着任された当時は新制大学が発足して間もない頃で、施設整備はきわめて不十分な状態にあったほか、カリキュラムなども不備で、教育体制の確立のために鋭意努力を傾けられた。しかも当時の社会状況を反映し、出身や年齢を異にする多くの学生を前に新たなカリキュラムの構成に腐心され、とりわけフィールドワークと演習を重視された。なかでも巡検に際しては、観察項目の的確な整理を指示され、夏休みの道内各地での地理実習や道外巡検などに早くから取り組まれた。玉のような汗をかきながら、疲れを知らない精力的な先生の巡検は、指導を受けた多くの学生が等しく記憶しているところである。退官される数年前から戦時中に被弾した負傷がもとで、歩行にいささか困難を感じられるようであった。巡検に熱意を注いでおられた先生としては、一線を退かれることに一抹の寂しさを感じられたのではと推察している。

先生はご専門の研究では、「石狩川の洪水について」(中央气象台時報、1951)などを発表されておられるが、関心は自然地理学をはじめとして広い領域に及んでいる。なかでも柏村一郎先生との共著になる「郷土の地理—北海道編」(宝文館)は、北海道に関する該博な知識をもとに、当時の地誌学の水準を上まわるものであり、科学的な地誌学の先駆をなすものであった。

さらに先生は自ら「北海道教育地図研究会」の会長として、大学と地域の学校との交流にも意を注がれた。最近とみに教育系大学のあり方が問われており、とりわけ学校教育との関わりが重視されているが、先生は早くからこの点の重要性を理解しておられた。これは単に教育系大学にとどまらず、これからの地理学のあり方を考える際には看過することができない視点といえる。

先生は時には学生に厳しく接する場合もあったが、本来は小事にこだわらない温容で、謙虚なお人柄であり、それは薫陶をうけたものが等しく認めるところである。本学会創設期にご苦勞をされた方のお一人である先生が逝かれて、一つの時代が過ぎ去った感がある。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(山下 克彦)